

## 言語・文学分野における「言語分野」について

### 1. 言語分野の定義

#### [ 学問分野としての定義 ]

言語分野は、人間固有の能力・活動である言語の諸側面を、客観的な証拠と実証的な手法に基づき、明らかにしようとする学問分野である。

「言語」は、それ自体が多義語である。その主な意味は、(1) 音声、身体動作、図像により、個人の間で知識を共有するための記号体系、(2) そのような記号体系を習得し使用する能力、(3) そのような能力を使って他の人間と知識を共有する活動、(4) 「ロシア語」、「アイヌ語」、「アラビア語」、「日本手話」などと呼ばれる個別の記号体系、(5) 個別の記号体系に従って産出された音声自体あるいはその記憶、および文字などにより記録された資料や作品、である。

なお「言語」という用語は、上記以外に、「絵画の言語」、「映像の言語」、「身体表現の言語」、「遺伝子構造の言語」、「ミツバチの言語」などのように、より広い意味でも使われるが、ここで対象とするのは、人間によって用いられる、大部分が恣意的な記号を生産的に（より正確には、再帰的に）組み合わせることによって構成される記号体系に関係する意味に限定する。

#### [ 言語分野に含まれる専攻等 ]

言語分野は言語学に限定されるものではない。システムや活動としての言語を客観的に捉えることを基礎とする学問分野は、すべて言語分野に含まれる。専攻の名称等で用いられている分野名を挙げれば、言語情報学、外国語学、日本語学や英語学などの個別言語研究（〇〇語学）、言語コミュニケーション論、異文化コミュニケーション論、国際コミュニケーション論、情報メディア学、言語文化学、などの分野である。

### 2. 言語分野に固有の特性

#### [ 固有の視点と関心 ]

#### (1) 普遍性と個別性（多様性）へのバランスのとれた関心

個々の人間は、種の特性として言語能力を普遍的に持つ。一方で、その能力は、特定の言語体系（ひとつとは限らない）を獲得し、それを使用することにより実現される。個別の言語体系はそれぞれ独特の特徴を持っている。また、同じ言語を話すと言われている人々の言語体系が一致しているわけではなく、同一の人間の言語使用ですら著しい多様性を示す。このような状況において、観察される多様な現象に目を奪われ、それを成り立たせている普遍的な仕組みと能力の存在を忘れてはならない。しかし同時に、性急に普遍性を求

めるあまり、多様な言語現象を正確に記述する努力を怠ることもあってはならない。研究者ごとに重点の置き方は異なるが、言語分野全体として見れば、普遍性と個別性の双方に十分な注意が払われている。

## (2) 比較の視点

人類の進化に伴う言語能力の変化を除けば、人間は同じ普遍的言語能力を持つと考えられる。一方、個別の言語体系は多様であり、しかも時間の経過とともに変化することを免れ得ない。しかし、個別の言語が示す多様性は、それらを互いに比較することで、個別性を超えた普遍的（一般的）特徴を知る手がかりを与えてくれる。比較は、時代の異なる言語の間でも、同じ時代の言語の間でもおこなうことができる。特に、比較によって言語の歴史的变化を推定する歴史比較言語学は、近代言語学に不可欠な多くの概念や方法を生み出し、その成立に大きく貢献した。比較は、普遍性と個別性を繋ぐ方法として、言語分野で常に重要な位置を占めている。

## (3) 個別の言語体系に与えられる価値の相対化

個別言語の社会的評価はさまざまである。広い地域で使われ、それを話すことが威信を持つ言語もあれば、仲間うちのみで使われ、話すことを話者が他者に知られたくないと思う言語もある。その一方で、個人の中では母語に特別な価値が与えられる。このように、言語に対しては社会的偏見（ステレオタイプ）が必ず存在する。しかし、個別言語に付与される偏見とその言語体系の間には、何の必然的関係もない。言語が持つ偏見は、それ自体が考察の対象となるものであり、言語研究の前提を構成するものではないことは、言語分野における基本的な理解である。

## (4) 「素朴な言語観」の相対化

私たちは日常的に言語に係わる多くの問題に直面するが、同時にその多くを、特に言語の特質を意識せずに解決している。例えば、対話相手の言語体系と自分の言語体系の間に違いがある場合は、ほとんど無意識のうちに、対話相手の言語体系に合わせるような調整がおこなわれる。また、相手が理解していないと思えば、同じ内容を別の言語形式を用いて表現することができる。新たに必要になったモノや概念には、すぐに新たな言語表現を作って対応するし、ある表現の使用頻度が増加すれば、より短い表現に置き換えることで、過剰な冗長性を避ける。異なる言語を話す人々の間でも、共有されるわずかの語彙さえあれば、伝達される内容は限定されるが、新たな言語体系を一時的に作り出すことさえできる。こうした無意識の対応や解決は、人間が生得的に持つ能力に加え、「素朴な言語観」とでも呼ぶべき、言語に関する偏見や経験的知識に支えられている。それは、言語表現とその指示対象とを同一視する一方で、言語表現を指示対象の名前と見なすような、互いに矛盾する見解を含んでいるが、大抵有効に働く。問題はむしろ、「素朴な言語観」があまりに身近であるため、それに気づき、客観的に捉える機会を多くの人が持たないことにある。

言語分野の学問は、自明とされる言語のこのような捉え方を相対化し、それを批判的に理解することの上に成り立っている。

#### (5) 研究方法における慎重さ

言語は言語を用いて説明することができる。しかし、これは方法論上の難問でもある。言語の考察を言語を使っておこなわざるを得ないため、研究対象を客観的に設定するのが容易でないからである。そこで、言語使用者としての直感や無意識が観察や分析の客観性を損なうことがないように、言語分野では多くの理論、概念、方法が考案されてきた。例えば、「(単)語」を必要に応じて「語彙素」、「語形」、「音韻的語」などと定義し直したり、異なる「意味」のレベルを明確に設定することなどである。しかしそれでもなお、言語分野の研究においては、言語を用いて言語を考察する危うさが常に意識されている。

#### (6) 学際的関心

言語は人間の基本的な能力・活動であるため、他のさまざまな能力、活動、現象と密接に係わっている。例えば、能力としての言語は注意、記憶、推論など、他の認知能力や、さらには人間の生理と無関係ではあり得ない。その考察は、行動科学や自然科学の対象ともなり得る。また、活動としての言語は、共同体を成り立たせている社会的な活動の一環として位置づけられ、社会科学も関心を寄せる。さらに、産出された言語（言語作品）の考察は、人文学の中核を成す分野である。一方、個別言語や、個別言語の一部（特定の文体など）を成人後に習得することへの大きな需要は常にあるが、言語の理解とともに効率的な教育方法の考案は、このような需要に応えるために不可欠であり、教育学との連携が必要とされる。以上述べたように、言語分野は、固有の理論と方法を持ちつつ、他の学問分野との交流をも極めて重要であると見なす学問分野である。

#### (7) 社会的貢献への指向

コミュニケーションは、社会の成立と維持に不可欠である。コミュニケーションは言語によりおこなわれるとは限らないし、言語の機能がコミュニケーションに限定されるわけでもないが、言語が人間のコミュニケーションにおいて中心的役割を担うことは明らかである。そのため、言語の特徴の解明がよりよいコミュニケーションに繋がっていくことは、当然期待される。それに応えるかたちで、言語分野の中でも外国語研究は、対象とする個別言語の研究と同時に、その言語の教育に深く関わってきたし、コミュニケーション論は、異言語間のコミュニケーションだけでなく、同一言語内でのコミュニケーションも含む広い範囲を対象としている。また、このように明示的に社会貢献を目指していない分野でも、言語研究は社会に貢献できるという考え方は、広く共有されている。

#### [ 多様なアプローチ ]

言語の普遍的特徴の解明と個別的特徴の解明とは、いずれも言語を理解する上で不可欠で

あり、普遍的特徴の解明には個別的特徴の理解が、また、個別的特徴の解明には普遍的特徴の理解が前提となる。**理論言語学**は言語の普遍的特徴の解明に重点を置く。**記述言語学**は共同体レベルでの言語の個別的特徴に、**社会言語学**や**方言学**は個人レベルでの言語の個別的特徴に重点を置く。社会言語学はまた、個人または共同体が複数の言語を持つ場合も扱う。複数の言語の接触を扱うアプローチは**接触言語学**とも呼ばれる。

言語自体にもいくつかの異なるレベルが設定できる。大きく分けて、音声、単語、文、発話のレベルである。それぞれに対応して、音声を扱う**音声学**、音声の機能面を扱う**音韻論**、単語の構造を扱う**形態論**、文や句の構造を扱う**統語論（統辞論）**、コンテキストと発話の関係を扱う**語用論**、そしてすべてのレベルにおける語や文などの言語形式の意味を扱う**意味論**という分野がある。

比較の視点を取るのには、主に**歴史比較言語学**と**言語類型論**である。歴史比較言語学は、同系統の異なる言語を比較することにより、それらの言語が辿った変化を推定するが、変化を引き起こすメカニズムの解明も重要なテーマである。一方、言語類型論は、一見ランダムに見える言語の多様性の背後にある規則性を発見し、そのメカニズムを解明しようとする。いずれも、理論言語学と記述言語学の双方と密接な関係を持つ。

言語の普遍的特徴の解明を目ざすにしろ、個別的特徴の解明を目ざすにしろ、実証的な手順を踏むものであるかぎり、実際の言語の使用（運用）の考察なしに研究を進めることはできない。言語の使用をどのように位置づけるかという観点からは、その結果に注目するアプローチ（**文献学**、**コーパス言語学**）、言語使用のプロセスに注目するアプローチ（**心理言語学**）、言語使用を可能にする能力・メカニズムに注目するアプローチ（**生成文法**、**認知言語学**）をあげることができる。

世界には多くの言語が存在する。それぞれは話者の生活に欠かせない能力であると同時に、独自の特徴をもった知識体系である。従って、それぞれの言語の研究に固有なアプローチもあって然るべきである。これらは、国語学、日本語学、英語学、中国語学のように「**語学**」と呼ばれる。

人類は歴史の中で、移住、婚姻、交易、略奪、侵略、布教などを通じ、母語以外の言語を話す集団や個人と係ってきた。今後も母語以外の言語を習得する必要は、決してなくなるまいだろう。母語話者が持つ個別言語の能力を、それを母語としない人々に、辞書や文法書などの形態を使って、知識や規則として言語化するとともに、それらの知識や規則の効率的な習得の方法を考案するのが**言語教育**の分野である。また、個別言語の中には、地域の共通語として使われるものがあるが、その使用地域や使用場面を拡大するための政策（言語政策）が講じられることもある。言語政策は、言語分野以外で扱われることもある

が、言語分野においては、**言語教育**や**社会言語学**の中で扱われることが多い。言語教育と並んで、**コミュニケーション論**も直接的な社会貢献が期待される分野であるが、言語は情報交換のための相互行為（コミュニケーション）の内部に位置づけられ、他の相互行為や話者の属性、さらには媒体との関係の中で、総合的に扱われる。

### 3. 言語分野を学ぶすべての学生が身につける（ことを目指す）べき基本的な素養

#### 3.1 言語・文学の学びを通じて獲得すべき基本的な知識と理解

言語分野だけでも、第2節であげたように、多様なアプローチがある。しかし、いずれのアプローチから言語分野を学ぶにしろ、身につけることを目指すべき基本的な知識と理解は共通である。

##### (1) 言語の構造的性に関する理解

産出される言語は、決して単なる線状的な要素の並びではない。いくつかの異なる階層に属しつつ抽象的で複雑な構造を成している。これは、すべての音声言語だけでなく手話言語にも普遍的に成り立つ特徴である。言語が持つ、この基本的特徴の理解は、リテラシーの形成に役立つだけでなく、言語について考察することがいかに大きな知的興奮を与えてくれるものかを、学生に気づかせる。

##### (2) 言語の多様性に関する理解

世界では、音声言語にしろ手話言語にしろ、さまざまな言語が話され、使われている。また、地域や集団により異なる方言（言語変種）を持たない言語はないし、場面や相手により使い分けられる表現（スタイル）をもたない言語もない。個々の言語のリテラシーを身につける以前に、我々の世界が言語的にいかに多様であるかを理解した上で、母語か外国語かを問わず、学ぶ対象となる言語の世界における位置づけを知ることは、言語分野に不可欠の知識である。

##### (3) 言語について考察する上で不可欠な概念や用語の理解

「母音」や「子音」、「単語」や「文」のような、言語について考える上で不可欠な概念や用語は、自明のように思われるが、理論的な前提なしに、それぞれの概念や用語の指示範囲や認定の仕方を定めることはできない。基本的な概念や用語の背後にある言語の捉え方を理解し、そのような捉え方も相対的なものであることを知る必要がある。

##### (4) 音声を作り出す生理的メカニズム（調音・構音）の理解

多くの言語は音声を媒体とする。従って、人間がどのように音声を作り出すか、作り出される音声にはどのような特徴があるかを理解することは、自分自身の音声を客観的に捉えることや、言語変化や言語のバリエーションを理解することのために不可欠であるだけで

なく、外国語を習得する上でも絶大な効果がある。

### (5) 言語と社会の関係に関する理解

言語はそれを使う人々の共同体（言語共同体）があつて初めて存在する。従つて、言語と社会の間には密接な関係があるが、それは、言語が社会（集団）を規定するとか、社会（集団）によつて言語が規定される、といった単純なものではない。言語と社会（集団）の複雑な関係を具体的な例を通して理解することは、言語に関する通俗的見方や印象のみに基づく判断に対して、実証的な態度で応ずることを可能にする。

## 3.2 言語・文学の学びを通じて獲得すべき基本的な能力

言語は人間の知的活動の基盤である。にもかかわらず、あるいはかえつてそうであるからこそ、私たちは言語を自明の能力や現象と感じ、敢えてその姿を理解しようとはしない。言語に係わるさまざまな問題に直面しても、「素朴な言語観」のお蔭で、ある程度解決できるからである。

実証性を欠く考察は、気づかぬうちにさまざまな偏見の影響を受ける。特に言語的多数派が持つ偏見は、ときに言語的少数派への差別を生み出す。とは言え、言語に対する偏見の影響は避けることができない。規範的な言語体系を生み出したり、母語への帰属意識を形作るのも、偏見だからである。

言語分野の学問は、このような自明の存在である言語に敢て意識を向けさせ、その働きや仕組みを対象化することにより、人間の知性の特性を客観的に理解する手掛かりを与えることができる。

言語・文学分野がその根幹とする、基本的な言語運用能力、および、その基礎の上に築かれる高度な読み書き能力としてのリテラシーの習得には、言語を実際に使い、その体験を個人の中に蓄積させることが重要である。文学分野の役割は、学ぶ者に、文学作品を初めとする多様な言語を体験させることにより、つまり、さまざまな言語作品の受容や創作などの実践を通じて、公共的であると同時に個性豊かなリテラシーを習得させることにある。一方、言語学分野はむしろ、言語を使用の場面から切り離し、あるいは、個々の言語使用に注意深く意識を向けることにより、その特性・特徴を明らかにする分野である。言語を客観的に捉えることは、言語使用を可能にする条件がいかに複雑かを理解し、言語使用者としての自分自身を相対化し、必要があれば、自分自身を操作することをも可能にする。言語分野は、文学分野とは相補的な役割を担いつつ、同じようにリテラシーの教育に大きな役割を果たす分野である。

以上。